



『気づいていくこと』から

「わたしには、探しているものがあります。そして、それを表現する言葉が見つかりません。」

33才の私が書いた「気づいていくこと」という文章の冒頭です。当時お世話になっていたコミュニティカフェのニュースレターに載せていただいたものです。そして、「行く先に一点の光が見えている気がしていた」とか、「他界した母から『昔からずっと方向が決まっていた』と言われた」と続きます。結びには、「野の草や木を愛で…」「田舎で畑をやりたい」「幼い時に行った父の田舎があこがれの場所」と書いています。

この文章を書いたすぐ後に、3か月ほど、秋田の農家民宿を手伝いました。前述のコミュニティカフェの方の知り合いが営んでいる民宿でした。そこでの生活は、羊のお世話、民宿のお客様との関わり、地元の方から教わる山菜の話…。世の中の大きな輪から距離を取り、できるだけ身の回りで小さな輪を循環させるような、丁寧な暮らしでした。大変なことが多かったけど、私がしたい生活はこんなのだ、と思いました。商業施設に勤めていた当時、自分が働くことで大量のごみが出ることに心を痛めていたのです。

あるとき民宿で、汚れた羊毛を見せてもらいました。その民宿は、壁の断熱材として地域の牧場の羊毛を使っていて、そのときよけた部分だ、ということでした。私はあまり考えもせず、その羊毛を洗い、家にいただいて帰りました。

偶然にも帰宅後すぐ、美術専門学校の友人から手つむぎ教室のお知らせをもらいました。手つむぎの用品を扱う会社で働き始めた、と。秋田から持ち帰った羊毛を持参して、手つむぎワークショップに参加。その魅力に取りつかれ、すぐにつむぎ車などの道具を買い揃え、自宅で紡ぎ始めました。

一生の仕事にしたい、と思いました。

その後、結婚、出産、パート勤務などで、日々の生活に精一杯になりました。丁寧な暮らしもできず、手つむぎを仕事にして収入を得るのを実現させるほど、心に余裕がつかれませんでした。ガマンばかりして10年以上過ぎました。50才になり、人生の半分以上はすぎてしまった今、残りの生涯はどうしたいのかと、このところ考えていました。

実は、今回、期限付きで原稿を書くことで、自分の生活や手仕事に関する気持ちを整理するのだと、自分を追い込んでみました。昔書いた文章を読み返したら、「野の花を愛で」たい気持ちは20年以上前のままでした。その確認はよしとして、ここ数年、体調を整えようと漢方内科に通い、ヨガを習い、食事に気を配るようになっていました。すべては、より前に進みたかったから。

どうして前に進みたかったのか。なにか、自分に申し訳ないような気がするから。

つむぎ仕事をしたいのは、その時間はいろいろなことから解放されるから。それだけ。

没頭して、楽しい時間を自分に作ってあげたい。出てきた答えです。

(糸つむり)



『家族と国家は共謀する
サバイバルからレジスタンスへ』

信田さよ子 著
角川新書
(2021 年)



カウンセラーとして、DV 被害者支援・加害者更生に長年たずさわってこられた信田さよ子さんの著書である。ご自身の仕事での研鑽の内に見たものを「こんなの自分だけでしょ、という極私的な経験が、国家の暴力(戦争や政治)と根底でつながっているとしたら・・・。」(あとがきより)という思いから記されている。

2022 年 7 月の安倍晋三殺害事件によって多額の献金など多くの被害者を生んでいる旧統一教会(家父長制家族を中心とする世界を主張)と自民党(政権与党、実質国家の中心)との癒着が明るみに出たことは、まさに国家が家父長制に基づく家族の構造的暴力を支持している現実を明白にしたのではな

いか。家族をつくる、と言うと多数が思い浮かべるのは、男と女とその子ども、というものだろう。筆者は「父・母・子のトライアド(三角形)から成る家族、近代家族において、権力と暴力を防止する装置は可能なのだろうか。」と言及し、アメリカやカナダの「厳罰主義的政策的対応に学ぶ視点が必要」である上で、「近代家族を支えるロマンティックラブイデオロギーの解体」の可能性を挙げている。

私は旧統一教会の合同結婚式を男女役割固定化・DV の内包・産めよ増やせよ的なものの象徴だと思っただが、ロマンティックラブイデオロギーの終着駅では？ DV で暴力の振るい方を学ばせて兵隊を作るつもりなのでは？とも思う。

信田さんは、戦争神経症と性虐待被害がなぜないものにされてきたかについても、述べている。本書の帯の「日々、私たちはそれに抵抗(レジスタンス)している。」の意味を考えたい。(野田)

『女教師たちの世界一周
小公女セーラから
ブラック・フェミニズムまで』

堀内真由美著
筑摩書房
(2022 年)



「小公女」と「ジェイン・エア」、この二つの物語を紐解くところから本書は始まります。共通点は「女子寄宿学校」。寒さとひもじさと、冷たい教師に耐える描写は、著者たちの実体験に基づいたものだったと言います。女子教育の悲惨さは 19 世紀イギリスの一つの社会問題でした。

当時のフェミニストたちも、参政権獲得に加えて女子教育改革を目標に掲げていました。一方で、中産階級が存在感を増し、その親たちの教育熱に応えるためにも、教育制度再編は喫緊の課題でした。かくして女子中等学校が、次いで女子大学が開校し、教育の入口はできました。では、出口は？

ミドルクラス女子の就業には多くの障壁がありました。職業の選択肢も参入枠も少ない、そもそも親が就業を許さないなど理不尽な現実、この国では修学の成果を活かす場がないと嘆く高学歴女子たち。「でもちょっと待って、私たち大英帝国の女子よね」と言ったかどうかは知りませんが、当時、版図は拡大を続け、カナダ、オーストラリア、インドにアフリカ、カリブ海と、世界中に広がる英国領。活躍の場を求めて、いざ行かんとはばかりに海を渡る帝国女子。女教師たちの世界一周の旅が始まります。

時代は下って第二次世界大戦が終わり、イギリスは戦後復興のための労働力として、英国領から多くの移民を招き入れました。親に連れられて、たくさん子どもたちが本国イギリスに渡ったのです。最終章はカリブ海の島からやってきた非白人女子のお話。本国の教育システムの中で学び、女教師となった彼女は、やがてブラック・フェミニズムの担い手になっていきます。およそ 150 年にわたる女教師たちの旅。最後にたどり着くところは？ (K ナカノ)

『男女平等への長い列
私の履歴書』

赤松良子
日本経済新聞出版
(2022年)



男女雇用機会均等法ができた 1985 年 5 月 17 日、労働省婦人少年局長だった赤松良子は、衆院の傍聴席で見届けた。法案作成の中心にいて尽力してきたが、妥協なしでは、法律の成立は難しく、「理想として思い描いていた法律とは大きくかけ離れたものになった。」と前書きに書く。

著者は、1953 年労働省(現・厚生労働省)入省以来、女性の地位向上に長く取り組んで来た。私は、女性グループからも反対運動が起こったこの法案を「ゼロと1では大きく違う」と作り上げたことをリアルタイムで見ている。また、私は 1974 年から正社員として働きながら、「国際婦人の 10 年」の国内行動計画が策定され(1977 年)、日本政府が女子差別撤廃条約に署名し(1980 年)、前述の均等法が成立して、女性の地位が制度上も向上していく時代を生きてきた。育児休業の制度も初年度に利用した。

著者を励ます「男女平等の実現のための、長い列に加わる」というフレーズがある。「戦前に少女時代を送り、男女平等をうたう新憲法のもとで大学を卒業し、女性官僚のパイオニアのひとりとなった。長い列に加わり、九十二歳の今も歩き続けているのだ。」と言う。均等法は、この後の列に続く後輩たちによって改正されていく。

私は、著者が代表を務める「クオータ制を推進する会(Qの会)」に関する彼女の講演を数年前に聴いた。列の先頭を歩きながら、後輩の後押しを続けるエネルギーはすごいと思った。

この本を読みながら、私自身の様々なことを思い出し、著者の人生とその業績を辿ることができた。新聞に掲載したものであるから、写真もあって、読みやすかった。第2部の資料編も役に立つ。(磯部)

『雲を紡ぐ』

伊吹有喜
文藝春秋
(2020年)



巻頭に書いてくれた糸つむりさんに紹介されて本を手にして、手織りを趣味にする私はタイトルに惹かれた。青い空に浮かぶ白い雲を紡いだら、いや、夕焼けに染まった雲なら、どんな糸ができるのだろう。考えただけでもわくわくする。

本の紹介には「壊れかけた家族は、もう一度、ひとつになれるのか？羊毛を手仕事で染め、紡ぎ、織りあげられた『時を越える布』ホームスパンをめぐる親子三代の心の糸の物語。」とある。主人公の高校生・美緒は、祖父母にもらったホームスパンの赤いショールの事で母と口論して、岩手でホームスパンの職人をしている祖父の所に家出をしてしまう。

ホームスパンとは、太い紡毛糸を使用した、ざっくりと粗い目の織物のことで、生まれはイギリスである。岩手では伝統産業として守られてきた。昔は羊を育て、家庭の手仕事で衣類を作り上げていた。受け継がれてきた「時を越える布」なのだ。

美緒は、祖父と働くことで物を作り上げることへのこだわりや、慈しむ思いを垣間見る。そして、家族もまた、紡ぎ、織るといった様々な物や事に人の手が加わり、思いが込められていることを知っていくのである。祖父母や父母、家族と自分が紡がれて糸になっていった。

糸は切れたらつなぐことができるが、母娘の関係はどうなのだろう。人は変えられないけれど、自分は変わるよね、美緒ちゃん！きっと自分の足で歩いていける。私は、自分が赤いマフラーか、おばあちゃんになったような気持ちになって読み終えた。2021年の第8回高校生直木賞にこの本が選ばれたという。若い世代の心にも届き、受け入れられたことをうれしく思う。(織姫)

第2回パートナーシップさいたまフェスタ参加企画 オンライン読書会(まんなかタイムス共催)

2023年1月29日(日)14:00~16:00 開催形式:オンライン(Zoom 利用)

課題本『家族と国家は共謀する サバイバルからレジスタンスへ』信田さよ子著(角川新書)

長年カウンセラーとしてDVなどに関わってきた信田さよ子さんが、現場から家族・国家を見つめ、その暴力について明らかにしていく本書。弱者にふりかかる家族・国家の暴力への私たちの抵抗(レジスタンス)とは?一人で抱えずに話し合っ共有しませんか?

参加費:無料 定員:12人 申込方法:まんなかタイムス コンタクトフォームに
必須事項とともに「1/29 ブックトーク参加希望」と書いてお送りください。

<https://mannakatimes.wordpress.com/contact/>

第23回 「ブックトーク&井戸端会議」 テーマ「選挙」 さいたま市女性学研究会(ゆい)主催

2023年2月19日(日)14:00~16:00 パートナーシップさいたま 第3会議室 定員24名

「ゆい」2022年夏第5号に紹介した三井マリ子さんの「さよなら!一強政治」を読み、選挙のことをもっと知りたいと思いました。2021年衆議院総選挙に出馬した佐藤まなみさん39歳を招いて立候補した側の疑問、モヤモヤをお話ししていただきます。私たちの生活と選挙・政治はつながっています。社会の問題に目を向けるきっかけになってもらえればと企画しました。参加ご希望、お問い合わせは、さいたま市女性学研究会事務局までご連絡ください。

事務局<磯部> 電話;048-641-3765 Eメール;i.sachie@nifty.com

■パートナーシップさいたま耳寄り情報■

第2回パートナーシップさいたまフェスタ

テーマ:「ジェンダー平等を実現しよう」

開催期間:令和5年1月24日(火)~2月23日(祝・木)(オンライン開催)

ジェンダー平等の実現は、SDGs(持続可能な開発目標)における17の目標のひとつです。

内容

- 1 基調講演動画 テーマ①「ジェンダー平等にたどりつけない日本 その理由を考えてみた」
講師:サンドラ・ヘフェリンさん(エッセイスト)
- 2 基調講演動画 テーマ②「I Am Here-私たちはともに生きている-」
講師:浅沼智也さん(看護師、映画監督)
- 3 出展団体によるイベント・活動紹介・展示
- 4 令和4年パートナーシップさいたま主催オンライン講座 プレイバック配信
- 5 男女共同参画施策の紹介 等

(男女共同参画推進センターホームページにて12月中旬頃、参加申込みHPを公開)

<https://www.city.saitama.jp/006/010/002/>



「ゆい」2022年冬号 第6号 (2022年12月1日発行)

編集 さいたま市女性学研究会(ゆい)

マーク、題字、イラスト 野田

<事務局>磯部幸江 電話 048-641-3765 Eメール i.sachie@nifty.com

発行 さいたま市男女共同参画推進センター | パートナーシップさいたま

〒330-0854 埼玉県さいたま市大宮区桜木町1丁目10-18シーノ大宮センタープラザ3F

電話 048-642-8107 FAX048-643-5801

<https://www.city.saitama.jp/006/010/002/index.html>

